臨床看護学

1　構 成 員

	平成15年3月31日現在
教授	5人
助教授	2人
講師（うち病院籍）	2人　（　0人）
助手（うち病院籍）	7人　（　0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	15人　（　0人）
研究生	2人
外国人客員研究員	0人
技官（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	0人
合　　計	33人

2　教官の異動状況

交野　好子（教授）　（期間中現職）
櫻庭　　繁（教授）　（期間中現職）
島田三恵子（教授）　（期間中現職）
奈良間美保（教授）　（期間中現職）
野澤　明子（教授）　（期間中現職）
鈴木みずえ（助教授）（期間中現職）
岩田　浩子（助教授）（期間中現職）
堀　　妙子（講師）　（期間中現職）
白尾久美子（講師）　（H14. 4. 1～現職）
佐藤　直美（助手）　（期間中現職）
大山　直美（助手）　（期間中現職）
稲勝　理恵（助手）　（期間中現職）
村上　静子（助手）　（期間中現職）
宮城島恭子（助手）　（期間中現職）
（関）
久保　正子（助手）　（H14. 4. 1～現職）
山崎　佳子（助手）　（H14. 4. 16～現職）

3　研究業績

数字は小数2位まで。

	平成14年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	9編　（ 7編）
そのインパクトファクターの合計	1.20
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	7編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	7編　（ 7編）
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4) 著書数（うち邦文のもの）	27編　（ 27編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編　（ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Adachi K, Shimada M, and Usui A: The relationship between the parturient's positions and labour pain. Nursing Research 53: 47-51, Jan-Feb, 2003
2. Suzuki M, Ohyama N, Yamada K, and Kanamori M: The relationship between fear of falling, activities of daily living, functional disability and health-related quality of life among elderly Japanese individuals using day services. Nursing and Health Sciences 4: 155-161, 2002.
3. 堀　妙子，関　恭子，奈良間美保：医療的処置を行っている小児が通院している外来看護の実態と看護師の意識に関する調査，日本小児看護学会誌11(2): 28-33, 2002.
4. 奈良間美保，堀　妙子：二分脊椎症児と家族のトータルケア－米国の2施設における専門外来の現状と今後の課題－，小児看護25 (8): 1009-1014, 2002.
5. 島田三恵子：低出生体重児の睡眠覚醒リズムの発達とケア．日本新生児看護学会誌, 9 (1): 2-13, 2002.
6. 野澤明子，大沢　功，稲勝理恵，山本真矢，佐藤祐造（2003）糖尿病外来患者の生活習慣，一般診療所での調査より．糖尿病　46 (2): 155-159.
7. 鈴木みずえ，山本清美，神田政宏，松井由美，小嶋永実，大山直美，竹内志保美，大城　一，金森雅夫，：痴呆性老人を対象とした動物介在療法（Animal Assisted Therapy: AAT）の個別の効果と経過の分析．保健の科学，44 (8): 639-646, 2002.

インパクトファクターの小計　［1.20］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 菱田鮎美，岩田浩子：消化器手術後患者の回復過程における食に対する思い．第33回日本看護学会論文集－成人看護Ⅰ－：74-76, 2002
2. 鈴木浩美，岩田浩子：容貌変容・機能障害を生じた頭頸部癌術後患者の社会参加に関連する要因とその構造．日本がん看護学会誌16 (2): 56-67, 2002

インパクトファクターの小計　［0.00］

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 佐藤直美，飯塚智恵，加藤あい，椙村春彦：遺伝カウンセリングに対する開業医と勤務医の認識に関する調査研究．第8回家族性腫瘍研究会学術集会抄録集：A34, 2002
2. 佐藤直美：遺伝医療における倫理的側面への医師の認識に関する研究－遺伝カウンセリングに焦点を当てて－．庭野平和財団平成13年度研究・活動助成報告集：86-90, 2003
3. 岩田浩子：急性期看護領域における看護師の有能さの検討－病棟管理者の認識の分析から－．日本看護研究学会雑誌25 (3): 320, 2002

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 宮本真澄，岩崎訓子，細貝恵美子，土屋充子，交野好子：更年期の受け止め方と対処行動－更年期症状自覚群と無自覚群の比較検討　日本看護学会論文集－母性看護－，P52-54, 2002.
2. 山口美樹，山下直子，石川美里，下嶋ひとみ，早川都世子，大石初枝，鈴木静江，交野好子：転落事故後の信頼関係回復過程，日本看護学会論文集－老年看護－，P35-37. 2002
3. 石久保雪江，岩田浩子，野澤明子：認定看護師の看護実践に関する検討．第33回日本看護学会論文集，看護管理：167-169, 2003
4. 石久保雪江，岩田浩子，野澤明子：認定看護師の専門的実践能力に関する検討，第22回日本看護科学学会学術集会講演集：294, 2002

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(3) 総　　説

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 奈良間美保：二分脊椎症児の母親のストレスに対する精神的援助，小児看護25 (8): 1000-1004. 2002.
2. 島田三恵子：生体リズムの生後発達．現代医療, 34: 1455-1459, 2002
3. 島田三恵子：「WHOの59カ条お産ケア」とわが国の出産ケア．周産期医学, 32（臨時増刊号）：158-161, 2002
4. 岩田浩子：看護教育における学習活動と教材検討　Nurse Education 3 (3): 4-17, 2002
5. 鈴木みずえ：痴呆高齢者に対するアクティビティケアの効果はあるのか，Nursing Today, 17: 37, 2002
6. 鈴木みずえ：痴呆高齢者は主観的QOLを訴えられるか，Nursing Today, 17: 36, 2002
7. 鈴木みずえ：転倒後の高齢者に対する心理的ケア，コミュニティケア, 4: 32-34, 2002

インパクトファクターの小計　［0.00］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著　　書

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 奈良間美保（2002）小児看護のめざすところ［小児看護学概論第1章小児看護の特徴と理念］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p4-8，医学書院
2. 奈良間美保（2002）小児と家族の諸統計［小児看護学概論第1章小児看護の特徴と理念］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p9-16，医学書院
3. 奈良間美保（2002）成長・発達とは［小児看護学概論第2章小児の成長・発達］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p32-34，医学書院
4. 奈良間美保（2002）成長・発達の進み方［小児看護学概論第2章小児の成長・発達］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p34-36，医学書院
5. 奈良間美保（2002）成長・発達に影響する因子［小児看護学概論第2章小児の成長・発達］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p36-37，医学書院
6. 奈良間美保（2002）発達の評価［小児看護学概論第2章小児の成長・発達］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p49-53，医学書院
7. 奈良間美保（2002）乳児［小児看護学概論第3章新生児・乳児］，系統看護学講座専門22　小児看護学［1］，p75-91，医学書院
8. 奈良間美保（2002）幼児［小児看護学概論第4章幼児・学童］，系統看護学講座専門22　小児看護学［1］，p94-111，医学書院
9. 奈良間美保（2002）疾病・障害が小児と家族に与える影響［小児臨床看護総論第1章疾病・障害をもつ小児と家族の看護］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p260-266，医学書院
10. 奈良間美保（2002）小児の健康問題と看護［小児臨床看護総論第1章疾病・障害をもつ小児と家族の看護］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p266-272，医学書院
11. 奈良間美保（2002）消化器症状［小児臨床看護学総論第3章症状を示す小児の看護］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p320-328，医学書院
12. 奈良間美保（2002）その他［小児臨床看護学総論第3章症状を示す小児の看護］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p356-361，医学書院
13. 奈良間美保（2002）在宅療養を行う小児と家族の特徴と看護［小児臨床看護学総論第6章健康障害をもつ小児の生活と看護］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p456-460，医学書院
14. 奈良間美保（2002）肺炎に罹患した小児のケア［小児臨床看護各論付章事例による看護の展開］，系統看護学講座専門23　小児看護学[2]，p536-544，医学書院
15. 奈良間美保，堀　妙子，関　恭子：平成12年度～14年度科学研究費間補助金（基盤研究（C）

（2））研究成果報告書「障害児の家族のストレスを緩和する養育支援のための看護システムの開発」，2003

16. 堀　妙子（2002）成長の評価［小児看護学概論第2章小児の成長・発達］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p37-49，医学書院
17. 堀　妙子（2002）新生児［小児看護学概論第3章新生児・乳児］，系統看護学講座専門22　小児看護学[1]，p56-75，医学書院
18. 堀　妙子（2002）看護総論［小児科臨床看護各論第1章染色体異常・胎内環境より発症する先天異常と看護］，系統看護学講座専門23　小児看護学[2]，p2-6，医学書院
19. 堀　妙子（2002）疾患をもった小児の看護［小児臨床看護各論第2章新生児の看護］，系統看護学講座専門23　小児看護学[2]，p53-68，医学書院
20. 岩田浩子（2003）急性期における高齢者看護の現状と将来展望〔岩瀬緑，宮崎徳子，山田紀代美編　事例を用いた高齢者の看護過程の展開－セルフケアモデルを使って－p29-30〕ヌーヴェルヒロカワ
21. 岩田浩子（2003）人工肛門造設による手術後の急性的変化とセルフイメージの変容に混乱している事例〔岩瀬緑，宮崎徳子，山田紀代美編　事例を用いた高齢者の看護過程の展開－セルフケアモデルを使って－p30-56〕ヌーヴェルヒロカワ
22. 鈴木みずえ, 渡辺素子, 小川佳子, 竹内幸子, 松下喜美子, 大城　一, 小林貴子, 櫻庭　繁, 松本友子, 中原大一郎, 金森雅夫：痴呆性老人に対する音楽療法の神経行動・内分泌学的評価手法に関する研究，第47回（平成12年度）社会厚生事業助成医学研究助成，2002
22. 鈴木みずえ，大山直美，金森雅夫：平成11年度～14年度科学研究補助金基盤研究C（2）「高齢者の自立を目指した転倒ケアに関する縦断的研究－転倒の予測，予防と自立支援を中心としたケア介入－」，2002
24. 鈴木みずえ：在宅介護支援の現状と将来展望，多くの問題を持ちつつ家庭で生活する痴呆老人の事例，岩瀬緑・宮崎徳子・山田紀代美編集，事例を用いた高齢者の看護過程の展開－セルフケア看護モデルを使って－，169-171, 192-210，ヌーヴェルヒロカワ，2003
25. 櫻庭　繁：精神障害をもつ人の看護，新体系看護学33　精神看護学，①第6章　主な症状に対する看護，p239-270，②第9章 精神科リハビリテーションの展開，p355-384，メジカルフレンド社

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 金森雅夫，鈴木みずえ，中原大一郎：平成12年度～14年度科学研究補助金基盤研究C（2）基盤研究C（2）障害者に対する音楽療法の神経行動・内分泌学的評価手法に関する研究，2002

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 佐藤祐造監訳，野澤明子他（2002）糖尿病と運動，糖尿病患者のスポーツ活動ガイドライン，大衆館書店

（5）症例報告

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

4　特許等の出願状況

	平成14年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5　医学研究費取得状況

	平成14年度
(1) 文部科学省科学研究費	6件　（ 500万円）
(2) 厚生科学研究費	0件　（　　万円）
(3) 他政府機関による研究助成	0件　（　　万円）
(4) 財団助成金	1件　（ 80万円）
(5) 受託研究または共同研究	0件　（　　万円）
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0件　（　　万円）

(1) 文部科学省科学研究費

奈良間美保（代表者）堀　妙子（分担者），関　恭子（分担者）基盤研究（C）(2)「障害児の家族のストレスを緩和する養育支援のための看護システムの開発」60万円（継続）

堀　　妙子（代表者）若手研究（B)「ハイリスク新生児の母親が経験する退院後の不安に関する研究」100万円（継続）

岩田　浩子（代表者）基盤研究（C）(2)「急性期の看護における看護実践能力の明確化と継続教育プログラムの開発」60万（継続）

白尾久美子（研究代表者）基盤研究C　新人看護婦(士)が修得する臨床看護実践能力に関する研究　140万円（継続）

鈴木みずえ（代表者）大山直美（分担者）基盤研究C（2)「高齢者の自立を目指した転倒ケアに関する縦断的研究－転倒の予測，予防と自立支援を中心としたケア介入－」70万円

鈴木みずえ（分担者）基盤研究C（2)「障害者に対する音楽療法の神経行動・内分泌学的評価手法に関する研究」70万円

(4) 財団助成金

鈴木みずえ（代表者）慢性疾患・リハビリテーション研究振興財団　痴呆性高齢者に対する

Activity Careのリハビリテーション効果に関する評価手法研究　80万円

6　特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

7　学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	2件
(3) 学会座長回数	0件	6件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	8件
(6) 一般演題発表数	4件	

(1) 国際会議等開催・参加：

4) 一般発表

ポスター発表

1. Watanabe H, Shimada M, Suzuki S, Murayama R, Toda R, Kamiya S, Nakane N, Adachi K, Agata T, Takeuchi M: A study about how pregnant /delivery care should be- a survey of postpartum women. International Confederation of Midwives, Wien, Apr. 15, 2002
2. Suzuki M, Watanabe M, Sakuraba S, Kobayashi T, Kanamori M, Nakahara D, Nagasawa S, Oshiro H: Evaluation of Music Therapy for the Elderly with Dementia- Changes of Behavioral Evaluation and Salivary Chromogranin A－, Third word congress on vascular factors in Alzheimer's disease, Kyoto, April 8, 2002
3. Suzuki M, Kubo M, Sakuraba S, Oshiro H : Group intervention using Music Therapy for the Japanese Elderly with Dementia, XII World conference of Psychiatry, Yokohama, August 27, 2002
4. Sakuraba S, Kubo M, Suzuki M : Suicidal ideation Alcoholism, XII World conference of Phychiatry, Yokohama, Aug 27, 2002

(2) 国内学会の開催・参加

2) シンポジウム発表

1. 奈良間美保：先天性疾患をもつ子どもの病気の理解とセルフケア，第12回日本小児看護学会，横浜市，2002年7月，
2. 島田三恵子：助産師教育に期待するもの－助産師教育の実際と展望－．第17回日本助産学会学術集会，那覇市，2003年3月

3) 座長をした学会名

1. 奈良間美保　第19回日本二分脊椎研究会，名古屋市，2002年6月
2. 奈良間美保　第9回日本家族看護学会，岩手郡滝沢村，2002年9月

3. 交野　好子　第　回日本母性看護学会,
4. 島田三恵子　第15回静岡母性衛生学会, 静岡市，2002年7月
5. 野澤　明子　第7回日本糖尿病教育・看護学会，名古屋市, 2002年10月
6. 櫻庭　　繁　第27回日本看護研究学会，横浜市，2002年8月

5）役職についている学会名とその役割

交野　好子　日本母性看護学会　理事
交野　好子　静岡県母性衛生学会　常任理事
交野　好子　昭和医学会　評議員
島田三恵子　日本助産学会　学術振興委員
島田三恵子　静岡県母性衛生学会　常任理事
櫻庭　　繁　日本看護科学学会　評議員
櫻庭　　繁　日本看護科学学会　看護用語検討委員会委員
櫻庭　　繁　日本看護研究学会　評議委員

8　学術雑誌の編集への貢献

	国　内	外　国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	3件	0件

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

国内の雑誌

1. 奈良間美保　日本小児看護学会　査読委員
2. 奈良間美保　日本看護科学学会　専任査読委員
3. 島田三恵子　日本看護科学学会　専任査読委員
4. 櫻庭　　繁　日本看護研究学会　査読委員
5. 櫻庭　　繁　日本医療看護学会　査読委員
6. 櫻庭　　繁　日本精神保健看護学会　査読委員

9　共同研究の実施状況

	平成14年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	5件
(3) 学内共同研究	0件

(2) 国内共同研究

1. 神山　潤（東京医科歯科大学大学院），日暮　眞（東京家政大学児童学科），瀬川昌也（瀬川小児神経学クリニック）乳幼児の睡眠に関する生活習慣の生体リズムへの影響に関する研究
2. 縣　俊彦（慈恵医科大学環境保健医学），竹内正人（葛飾赤十字産院），戸田律子（日本出産教育協会），神谷整子（日本助産婦会），中根直子（日本赤十字医療センター）日本の妊

娠出産育児ケアに関する疫学的研究

3. 白尾久美子，野澤明子，稲勝理恵，水谷聖子（日本赤十字愛知短期大学），小林尚司（日本赤十字愛知短期大学）：新人看護婦(士)が修得する臨床看護実践能力に関する研究
4. 鈴木みずえ，松下恵美子（浜松医科大学付属病院看護部）天野えり子（伊豆長岡町保健センター）山田紀代美（宮城大学看護学部）　基盤研究C（2）「高齢者の自立を目指した転倒ケアに関する縦断的研究-転倒の予測，予防と自立支援を中心としたケア介入－」
5. 鈴木みずえ，大城　一（遠江病院）慢性疾患・リハビリテーション研究振興財団　痴呆性高齢者に対するActivity Careのリハビリテーション効果に関する評価手法研究

10　産学共同研究

	平成14年度
産学共同研究	0件

11　受　　賞

12　研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 障害児の家族のストレスを緩和する養育支援のための看護システムの開発

平成12年度に実施した実態調査に基づき，二分脊椎症児とその家族を包括的にとらえた新たな支援方法を開発し，就園・就学前後に看護相談を実施した。その結果，健康管理の自立が進んだ事例では母親の育児ストレスが緩和するなど，小児と母親の相互効果が見出された。さらに，研究の成果に関する情報提供と看護のネットワーク化を図るために看護フォーラムを開催し，専門外来の機能やコーディネーターとしての看護の役割など，看護システムの開発に関わる重要な示唆を得た。

（奈良間美保，堀　妙子，宮城島恭子）

2. 低出生体重児の母親が退院後に感じている不安に関する研究

低出生体重児の母親が感じている不安について，平成13年度に引き続き面接調査を行った。子どもの成長発達につれ母親の不安は変化していた。そして母親の気持ちと子どもの成長発達の実際にずれが大きくなるほど，母親の不安が強くなることが示唆された。また子どもが成長してきた母親の中には，出生時から現在までの経過について子どもに説明しようと考えている母親も見られたが，どのように説明するとよいのかという点で不安を感じており，このような母親への支援の必要性も示唆された。

（堀　妙子）

3. 乳幼児の生活習慣の生体リズムへの影響に関する研究

親の生活スタイルや社会の変化などにより乳幼児の就寝時刻が遅くなっている事が考えられる。就寝時刻が遅くなるほど夜間の睡眠時間が短縮され，夜間の睡眠不足によりサーカディアンリズムの同調の遅れや生体諸機能の日内リズムの乱れが示唆され，夜間の睡眠時間に産成される免疫物質の低下，幼児期の基本的生活習慣や社会性の発達への影響が報告されている。これらのことから早

寝早起きの必要性が提唱され，保育・母子保健関係者によるサポートグループと共にその学術的な裏付けのための研究活動を開始した。

（島田三恵子，神山　潤[1]，瀬川昌也[2]，日暮　眞[3]）[1]東京医科歯科大学小児科，[2]瀬川小児神経学クリニック，[3]東京家政大学児童学科

4. 日本の妊娠出産育児ケアに関する疫学的研究

妊娠出産育児ケアの質と満足度に関する全国調査：WHOの1996年 "Care in Normal Birth: a practical guide" のガイドラインに基づいて，日本の産婦が受けた分娩ケアの現状について，全国47都道府県，および大学病院，一般病院，産科診療所，助産院の医療機関4種に層化無作為抽出法により対象妊産褥婦約10,000名割付けた全国調査を行った。妊婦健診での医療者の対応・説明，出産中のケアや医療介入，産褥育児期のケア質と，産婦や母親の満足度等との関連に関して多変量解析を行い，どのようなケアがどの程度（オッズ比）満足度に影響する検討し，今年度末に学会発表した。国際的な比較も行い国際誌への投稿準備中である。分娩施設の選択・転院理由と満足度に関する全国調査は学会誌に投稿中である。

日本における分娩の直接介助者の実態に関する全国調査は同年日本の人口動態統計の出生証明書および国際的な比較も行い，国際誌へ投稿中である。

（島田三恵子，縣　俊彦[1]，竹内正人[2]，神谷整子[3]，戸田律子[4]，中根直子[5]）[1]慈恵医科大学，[2]葛飾赤十字産院，[3]日本助産婦会，[4]日本出産教育協会，[5]日本赤十字医療センター

5. 心筋梗塞後の回復期非監視型運動療法実施を促進する心理的要因の検討

心筋梗塞発症後の回復期における非監視型運動療法実施を促進する心理的要因について検討することを目的として質問紙調査を行った。対象は，回復期心臓リハビリテ-ションプログラムを実施していない6病院において心筋梗塞発症により再灌流療法を受け，発症後2ヶ月以上4ヶ月未満を経過した外来通院中患者45名である。その結果，運動実施群では，運動を行うことへの自信感が運動の開始および継続を促進し，習慣化された運動を実施しなかった時に生じる不快感や不充足感が運動を行うなかで形成され，この行動感覚により運動の実施にむけた動機づけが再び強化されていると考えられた。以上より，運動の開始，継続にむけて自信感および行動感覚への介入の必要性が示唆された。

（稲勝理恵，野澤明子，村上静子）

6. 新人看護師の仕事への適応尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

新人看護師就職後1年間の体験の分析結果をもとに，仕事への適応について把握するための尺度の開発を行った。平成14年4月に初めて就職した看護師197名（有効回答率84.9%）を対象に質問紙調査を実施した。新人看護師の仕事への適応尺度の項目は，面接調査の分析結果をもとに48項目作成した。妥当性の検討のために，自尊感情，コミュニティ感覚，ストレス反応に関する尺度を設定した。

項目分析の結果，「仕事への志向」6項目，「仕事における体験」6項目，2次元の尺度が抽出された。適合度は，「仕事への志向」がGFI0.98，AGFI0.95，RMSEA0.04，「仕事における体験」

がGFI0.99，AGFI0.98，RMSEA0であった。信頼性は，「仕事への志向」のα係数0.74，「仕事における体験」のα係数0.71であった。ストレス反応，自尊感情ともに有意な相関を示し妥当性は確認された。よって，信頼性・妥当性が確認された尺度であると判断された。

（白尾久美子，野澤明子，稲勝理恵，水谷聖子（日本赤十字愛知短期大学），小林尚司（日本赤十字愛知短期大学））

7．看護学生の安全についての意識の現状（成人看護学実習の経験を通して）に関する研究

看護医療事故防止のため看護の資質向上が迫られている昨今，看護基礎教育での取り組みが強く望まれている。インシデントに気づきレポートを書くことは自己の意識に大きくかかわると考え，実習における学生の安全についての意識を明らかにすることを目的とし，当大学看護学科3年次後期から4年次前期の学生57名に，安全についての意識尺度を用い，質問紙調査を行った。その結果，安全への意識が高いのは慎重さと安全への関心であり，看護行為の黙従性および安全への関与は低い傾向にあった。経験知識ともに未熟で浅いことが安全への関与に影響し，不充分な知識・自信のない技術のまま，現場でよく考えることなく行動してしまう傾向にあることが看護行為の黙従性に反映していると考えられる。また，実習の中で看護ケアを振り返り自分を見つめる機会となる経験をすることで，様々な学びや気づきから安全の重要性や必要性の意識を強める変化を生じていると考えられる。このような学生の特徴・傾向を教員が再認識し，根拠にもとづいた看護ケアの提供を学生が行えるように指導することの重要性が示唆された。

（村上静子，岩田弘子，野澤明子）

8．血液透析患者の自己管理行動尺度の開発に関する研究

血液透析患者の食事や日常生活における自己管理の確立を目指した援助は，看護者の重要な役割である。しかし，これまで透析患者の自己管理行動を評価する方法は，臨床的データにより評価されることが多かった。この研究の目的は血液透析患者の自己管理行動尺度の作成と尺度の信頼性・妥当性を検討することである。血液透析患者の自己管理行動の定義，構成概念，下位項目の作成，透析室勤務の看護師と患者へのインタビューにより内容を検討した後，血液透析患者約100名による調査による検討を予定している。

（野澤明子，王　愛平，白尾久美子，佐藤直美，稲勝理恵）

9．中国と日本における血液透析患者の健康関連QOLの比較

血液透析患者の健康関連QOLは，わが国においても調査・研究が行われ，SF36による健康関連QOLは，一般健常人に比較し全体的に低値であることが明らかになっている。しかし，これまで中国と日本の透析患者の健康関連QOLを比較した研究は，全く行われていない。今回，両国の血液透析患者各100名づつによる調査を検討中である。

（王　愛平，野澤明子，白尾久美子，佐藤直美，稲勝理恵）

10．遺伝子診療部診療記録を用いた事例分析によるクライアントのニーズの検討

遺伝医学の発展に伴い，遺伝子情報を適切に医療の場で利用するための新しい遺伝医療に注目が

寄せられるようになってきている。看護職としてはその中でどのような役割が担えるのかを実践を踏まえた研究により明確にしていくことが望まれる。この研究では，遺伝子診療部の診療へ参加しながら，まず診療記録から一つ一つの事例を質的帰納的に分析することにより，遺伝子診療部を受診するクライアント・家族のニーズを明らかにすることを目的とする。今後のクライアントの受診に伴い，データ収集の予定である。

（佐藤直美，野澤明子）

11. 急性期における看護実践の構造とOJT教育の構築に関する研究

急性期看護領域は対象患者の健康障害の特性から，高度なアセスメント能力，的確な治療援助，変化を予測した観察と安楽性への援助などが求められている。本研究は臨床実践の具体的要素と構造を明らかにし，より効果的かつ活用しやすい現任教育プログラムを開発しようとするものである。

昨年度は周手術期にある患者のカルテから看護者のアセスメントと援助活動を抽出し，さらにOJTの企画，実施の責任を持つ病棟管理者が急性期の看護の有能さやスタッフの能力をどのように認識しているかを明らかにするため面接調査を実施し，スタッフとしての能力-急性期看護に必要な能力－有能さの能力－が階層構造を示し，アセスメント，専門的実践，さらにはコラボレーションにいたる要素が整理された。本年度は研究課題の主軸である「急性期看護実践」の要素と構造を探求するため県内3総合病院の外科病棟において，手術直後の看護活動を参加観察法によりデータ収集した。現在その結果を整理分類し，これまで得られてきた結果とあわせて急性期実践活動の核となる要素を明確にし，その構造を能力形成過程として教育プログラムに転換するかについて検討中である。

（岩田浩子，大山直美）

12. 医療現場におけるヒューマンエラーに関する研究

医療事故防止は病院施設の必須課題でありインシデントレポートの分析や具体的事故防止活動の効果についての報告がなされている。医療におけるエラーの多くは人によるヒューマンエラーであり，人の認知行動に関する分析が求められている。本研究ではインシデントレポートをSHELモデルとヒューマンファクターから分析し「ルール違反」「思い込み」がエラーの重要なトリガーであり，さらに医療者間の人間関係や相互の「思い込み」などの組織課題を明らかにした。結果の概要は本学付属病院職員安全研修において発表した。さらに，「リスク意識（安全に対する危険意識）」の脆弱さが示唆されたため，看護職を対象としてインシデント・医療事故・安全や危険の意識について質問紙調査を実施した。現在そのデータを分析し，インシデントの分析結果と比較検討中である。インシデントの分析結果は平成15年年度日本看護管理学会発表予定である。

（岩田浩子）

13. 高齢者のQuality of lifeを高めるためのケア介入研究

痴呆，寝たきりなどの障害予防および高齢者のQOL維持，向上を目的としたケア介入研究を継続して研究している。平成14年度は（1）ペット型ロボット介在療法（2）痴呆高齢者の主観的QOLの

追跡調査（3）転倒リスク調査を実施した。ペット型ロボットを用いた動物介在療法は，痴呆高齢者に対するアクティビティケアであり，介護保険制度における看護ケアの質の向上として重要な課題である。それぞれのプログラムの構築とともにその効果に対する評価手法に関する研究を実施しており，ケア介入の実践に着いて高く評価され，静岡テレビで取り上げられ，全国放送された。痴呆高齢者の主観的QOLについては，米国Goldmad老化研究所Dr. Brodから許可を受け，日本語版の信頼性，妥当性を検証し，14年度は1年後の追跡調査を実施した。転倒予防研究に関しては，転倒リスクの解明として在宅高齢者，老人保健施設および特定機能病院に入院する高齢者など健康レベルの違による転倒リスクの違いについても分析し，これらを用いて今後は，転倒リスクアセスメントツールを開発する予定である。

（鈴木みずえ，大山直美，岩田浩子，櫻庭　繁，松下恵美[1]，大城　一[2]，天野えり子[3]）[1]浜松医科大学付属病院，[2]遠江病院，[3]伊豆長岡保健センター

13　この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

1. 高齢者のアクティビティケアについては，客観的科学的にケアとしての効果を評価することを目的に研究を開始した。ペット型ロボットは，動物介在療法の代替であるが，21世紀のロボット社会を予測した新しいアクテビティ・ケアである。高齢者は予想以上にペット型ロボットに愛着を示し，健康関連QOLおよび孤独感が改善され，静岡新聞，テレビ静岡などにも報告された。わが国では痴呆高齢者の主観的なQOLの側面に関する評価尺度はなく，介護保険制度において重視されている痴呆高齢者の人権保護および高齢者の尊厳を基本とした痴呆患者に対する看護ケアをさらに専門的に明確化にする上でも重要な課題と言える。単年度の評価尺度の信頼性に関しては13年度に確立され，14年度は縦断的調査が実施された。高齢者の転倒ケアについては，様々な高齢者の健康レベルに合わせた転倒ケアの介入および看護ケアのシステム化が必要である。浜松医科大学付属病院の転倒リスク調査を付属病院看護部とともに1年間実施し，今後，特定機能病院用の転倒リスクアセスメントツールの開発が期待されている。

14　研究の独創性，国際性，継続性，応用性

15　新聞，雑誌等による報道

1. 鈴木みずえ（2002）ペット型ロボット治療に効果　痴呆患者に笑顔生まれた　静岡新聞，4月20日夕刊
2. 金森雅夫，鈴木みずえ（2002）サイエンス特番：ロボットが我が家にやってくる，テレビ静岡，7月28日　16：00-16：50
3. 金森雅夫，鈴木みずえ（2003）名医のベストセラピー　痴呆：動物介在療法　ペット型ロボットで癒し効果　うつ状態や被害妄想などの随伴症状が改善，週刊朝日，2月7日号